



会報

会報 第16号

令和6年4月発行

寄稿

「文房四宝」——其の三「墨」編

せき いずる
関出

墨は、その奥行き、深さを
知るほどに、魅力あふれる格
別な存在です。ニュアンスに
富む黒系統の色調には様々
な違いがみられ、基底物とな
る紙の性状とともに、優れた
墨色（発墨）による表現は、
人々の心を引きつけます。書
画の墨色は、単に濃淡にとど
まらず、紙質となる組成や、
生紙、礬砂引き（熟紙・撥水
加工紙）など、墨の滲みや、
かすれ、浸潤と溜まりの具合
とが相まって変容し、そこ
には造形表現上の創意が加わ
り、深い味わいが発揮されま
す。

中国で発祥した墨の来歴
において、今日まで伝承され
ている固形墨の製法は、唐代
には成立し、水墨画の山水画
法も編み出されたときからま
す。爾来、墨を構成する煤や
膠、香料の其々に、適した素
材が用いられました。煤（炭
素）の微細な粒子自体は疎水
性ですが、膠とよく練り（中
国では叩き）合わせることで

水との親和性を得て、墨汁（墨液）
となり、書画に活用されてきまし
た。膠自体の強度、濃度と量の調
整や、軟水と硬水などに関係して、
和墨と唐墨には相違がみられま
す。

日本に伝播した固形墨は、松

（樹脂を多
く含む赤
松・肥松な
ど）や、植
物油（菜
種・胡麻・
桐・椿・大
豆など）を
燃やして得
た煤に、膠
（牛・鹿・
魚鱈などか
ら抽出、中
国では驢馬
の阿膠も）
と香料（龍
脳・龍涎
香・麝香な
ど）を練り
合わせ、木
型（梨や枇



煤(油煙)



採煤(油煙)

把材）に込めて成型した後、乾燥
（くぬぎの木灰の間で、割れを避
けつつ徐々に）させたものです。
油煙墨用の採煙には、蘭草（イグ
サ科）の莖髓を灯芯として使い、
微細で均一な煤を採取いたしま
す。傾向として、煤の粒度が粗く
不均一な松煙墨は青紫色系、微細
茶褐色系の墨
色を呈します
固形墨の製
造は、寒冷な
時期に熟練し
た職人の手作
業で行われま
す。現在、日
本における主
要な生産地は
奈良県（奈良
墨）で、他に
三重県（鈴鹿
墨）、和歌山県
（紀州松煙墨
）があります。
一方、液体墨
（鋳物油の力
ボンブラッ



型入れ



木型(梨材)

クと水溶性合成樹脂など)も改良され、手軽に使用する墨液として普及しております。他には、朱墨など各種色料(顔料や染料)を用いた彩墨も製造(中国では古くから)されております。中国における歴代の名墨(徽墨・乾隆御墨など)や、名墨匠(胡開文・曹素功・程君房・方于魯など)の古墨は憧憬の的として、専門家や愛蔵家に限らず、広く知られております。

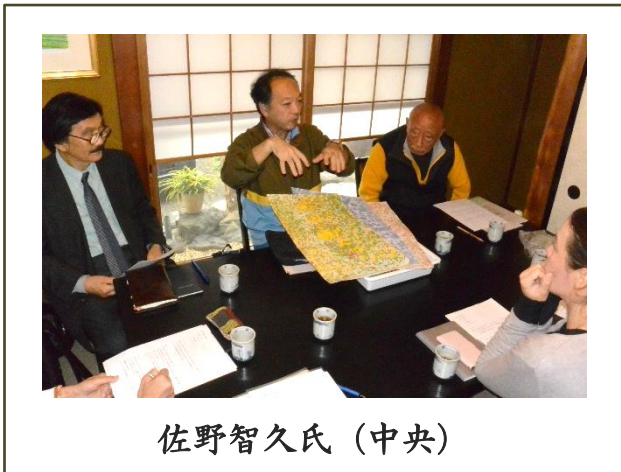
令和五年度 記念講演会開催

昨年十一月、駿河半紙技術研究会の総会内において、佐野 智久氏による記念講演会が開催されました。演題は『エルブ(トルコ)のマーブルリングとの出会い』でした。佐野氏は学校法人中村学園 静岡福祉医療専門学校での教諭です。エルブ(Ebru)とは十四世紀ごろ、中央アジアからトルコへと伝わった、マーブルリングの技法です。その技法と使用する道具などを解説して頂きました。

さて、文房四宝は、「水」のつながりが密接な道具・用材です。墨跡には、筆者の造形理念と技量の実態がそのまま反映して書画紙面にとどまります。「墨跡をなかつたことと、水に流す」・・・それは出来ません。

【筆者】
関 出 せき いずる

駿河半紙技術研究会
会員・画家



佐野智久氏 (中央)

駿河半紙技術研究会主催 令和6年度 総会・記念講演会・懇親会のお知らせ

会期 令和6年11月9日(土) 11:00~13:00
会場 富士宮市矢立町737 和風料理「花月」 TEL 0544-23-4141
会費 1名 2,000円(税込み)
内容 11:00~12:00 記念講演会
講師 関 出氏(当会員・画家)
仮演題 「文房四宝」の執筆に関わって
12:00~13:00 懇親会 美味しい和定食を。
申込方法 郵便振替をご利用頂き、前金制でお願い致します。
00830-7-137 内藤恒雄
申込締切日 令和6年10月20日(日)
内藤恒雄手すき和紙記念館 内藤恒雄
419-0301 静岡県富士宮市上柚野907-1 TEL 0544-66-0738
★★ 令和6年度の年会費1,000円のご入金も忘れずをお願い致します ★★



乾燥



油煙墨(古墨)



松煙墨

内藤会長が「2023 東アジア文化都市 紙文化特別展」に参加した記録『韓国紀行』をホームページに掲載しました。ぜひ、ご覧ください。

